

Title	続リカルドオの価値学説論 (一)
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.8 (1922. 8) ,p.1074(26)- 1096(48)
JaLC DOI	10.14991/001.19220801-0026
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220801-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

續リカルドオの價值學說論(二)

小 泉 信 三

(一)

Ricardo に從へば貨物の市場價格又は現實價格は、時々需要供給に由りて左右せらるゝ雖も、自由競争の行はるゝ限り、貨物の市場價格は絶えず其自然價格に一致せんとするものにして、久しきに亘りては其上下に離反すること能はず。蓋しその然る所以は利潤率平均の一事あるが爲めにして、Ricardo の所見に從へば、一貨物の市價其自然價格以上に昇るときは、其生産者は普通率以上の利潤を收むるを以て、資本は他の比較的不利なる業務を去りて、此の特に有利なる生産業に集中し來り、貨物の供給を増加せしめて其價格を下降せしむべく、また市價自然價格以下に下降するときは、之と反對の作用行はれて、究局此二者を一致せしめずんば已ま

ざるべきを以てなり。是を以て觀れば Ricardo が所謂貨物の自然價格は、之を生産せんが爲め投下せられたる資本額と、之に對する平均利潤との加算に外ならず。而して投下せられたる資本は之を分解すれば直接に支出せられたる賃銀額、及び生産用具生産の爲め間接に支出せられたる賃銀と、之に對する利潤との二者に歸着す。Ricardo が別に一貨物の生産費と稱するものも亦、此貨物生産の爲めに投せられたる賃銀と利潤との總和を指すものなり。(Principles p. 46 note, Letters to Malthus p. 176) 故に貨物の市場價格はまた其生産費の周圍に旋廻して、結局此に歸着せんとするものなりと謂ふも Ricardo の眞意に反することなかるべし。(價值を左右するものは供給にして、供給其者は比較的生産費に依て支配せられ、貨幣に現はされたる生産費は労働の價值と並に利潤とを意味す。今假に予の貨物と貴下の貨物と同價值なりとせば、其生産費は同一ならざるべからず。Letters to Malthus p. 176) 而して右に述べたる貨物の自然價格は即ち其交換價值に外ならざるものにして、而して此價值は生産上に要する労働の相對量に由て決せらるゝものなりと謂ふ。此説明は、暗黙の間同額の資本は必ず同量の労働を代表(或は雇傭)すとの推定を

前提とするものにして、此前提にして正しきを得ば、貨物の市場價格は假令一時其價值の上下に離隔することあるも、利潤率平均の作用に由りて早晚必ず是に復歸すべきの理なること勿論なるは、既に述べたるところの如し(本誌第十六卷第四號六一頁)。然るに此推定の事實ならんが爲めには二個の條件の備はることを必要とす。第一、貨銀額の正確に投下労働量を反映すること、第二、資本家の支出資本中に於て貨銀の占むる比例の同一なること是なり。第一の條件に就てRicardoの論するところは、周到明確なるを得ずと雖も、彼れは畧ぼ此條件の實現せらるべきことを信じ、貨銀額の高低は投下労働量に相應せんとするの傾あることを認めたるもの、如しと雖も、第二の條件の事實に於て備はり難きことはRicardo自ら明かに之を認めたり。即ち其Principles第一章の後半に於て、其價值説に修正を加へ、又單純なる労働價值説を固執せるMcCullochに對して、價值を決定する原因の決して一ならずして、生産上に費やさるゝ労働量と、始め労働の投下せられてより生産物の完成販賣せらるゝに至る迄の時間との二なることを、反覆力説したるは此に由るものなり。今Ricardo以後凡そJevons現はるゝに至るまで、英吉利經濟學の主流を

なせる學者の價值論は、概ねRicardoを基礎として發足し或點に於て之を擴充し、他の點に於て之に精鍊を加へたるに外ならざるものなりき。而して此の擴充精鍊は、主として上記二條件の上に就て行はれ、投下労働量と價值との關係を漸く稀薄ならしむる資本家生産費説は、その此結果として到達したる結論なり。然れどもRicardo其人が貨物の交換價值は必要労働量之を決すと謂ひたるも、其論據は、貨物間の交換比率は貨物の相對的生產費に由て決せられ、而して生産費は労働量に比例すとの推定に基づけること右述の如くなるを以て、生産費と労働量とが比例を保たざること明かとなれる上は、純粹なる労働價值説の維持すべからざるの理は充分明白にして、Ricardo自身も亦決して之を認むるに吝ならざりし事既述の如くなれば、後の生産費説は、Ricardo自ら端緒を開ける労働價值説に對する修正の、更に數歩を進めたる當然の成果と認むべきものならん。Ricardo以後J. S. Mill以前の卓越せる理論家として指を先づ屈すべきNassau W. Seniorが生産費として、労働と共に節欲abstinenceを挙げたるは、Ricardoが價值決定の原因として、労働と共に生産物の完成販賣に至る迄の時間を挙げたると脈絡相通するものにして、決して

Ricardo 流の價值學說と相容れ難きものとは評すべからざるなり。

(二)

Senior は富なる語を解して、(一)利用を有し、(二)供給に制限あり、而して(三)賣買讓渡貸借し得る transferable もの是なりと謂ひ、而して此等の要件を備ふることは、價值を有すと云ふと同義なりと云へり (Political Economy, 3d. ed. 1854)。此三要件中 Senior は最も重きを供給の制限に措き (ibid., pp. 11-13) 労働の投下が物をして價值あらしむる如きも、労働の投下を必要とすることは、即ち供給の制限を意味するが故に外ならず、從て供給制限の要件備はる限り、労働の投下は之なきも妨げずとなし、更に労働の投下に由らず、供給の制限に由て價值を有する貨物の、富の重なる部分を占むることを認めて、Ricardo 價值學說の適用範圍を狭めたり。即ち曰く、詢に利用あるところに於ては、生産に必要な労働の附加は必ず價值を成立せしむ。如何となれば労働の供給には制限あるを以て、從て其供給に之を必要とする物體は、此必要其者に依て供給を制限せらるゝを以てなり。然れども供給を制限する他の如何なる原因も、一貨物の價值の有効原因たることに於ては、其生産に對する労働の

必要と毫も擇ぶところなし。而して事實上、若し人の使用する一切貨物が、何等人間労働の干渉なくして、自然に由て供給せられ、而かも正に現在と同一量に於て供給せらるべしとせば、その或は價值なきに至り、或は現在と異なる比率に於て相交換せらるべしと想像すべき理由は存せざるなり。Ricardo 氏に對する答への第一は、富の諸貨物にして、其價值の主要部分を各自その現實生産に投せられたる労働に負ふ事なきものは、その重要ならざる小部分を成すものにはあらずして、實に富の要部を形成するものなること、又第二に供給の制限は、労働其者の價值に缺く可からざるものなれば、價值の據て立つ條件として、労働を取りて供給の制限を排するは、實に一般的原因に代ふるに部分的原因を以てする所以なるのみならず、明かに、指定原因の力源たる眞原因其者を排する所以なること是なり (ibid. p. 24)。斯の如く價值は供給の制限の支配するところたりと雖も、人爲に由て供給を増減すること能はざるものは、措き、規則正しく、或は略ぼ規則正しく之を増減し得るものにありては、供給は生産費に由りて制限せられ、而して彼の所謂生産費は生産に必要な労働と節欲との合計を以て成ること前述の如し (ibid. p. 101)。節欲な

る新術語は彼れに従へば、人のその支配し得るもの、不生産的使用を節し、若しくは故らに直接の結果の生産を捨て、遠き將來の結果の生産を擇ぶの行爲を意味し、而して此行爲は勞働及び自然要因以外の生産要因にして、資本存在の爲めに其協力を必要とし、其の利潤に對する關係は猶ほ勞働の賃銀に對する關係に等しきものなりと謂ふ。(pp. 58, 59, 89)斯の如く節欲と之に對する報償たる利潤とを區別し、之に照らして Malthus, Torrens 其他前人の生産費の定義に對して彼れの下せる批評 (pp. 97-101) には、頗る傾聽すべきものあり。即ち勞働と共に利潤を以て生産費構成要素の一となせる Malthus に就ては曰く、節欲若しくは之と同義の語を缺きたる事は、Malthus 氏をして言語の不精確に陥らしめたり。氏は單純なる勞働の外猶ほ或物の生産に缺く可からざることを感知したるもの、如し。氏は單純なる勞働のみの不毛の荒地を化して價值ある森林たらしめざるべきこと、樹木栽培者には幼樹を植付け、且つ之を保護する勞働の外、之に加ふるに遠き將來の結果の生産に其勞働を向くる附加犠牲あること、累代の所有者は幼樹の成長を忍び待つことに依りて、其後繼者の利益の爲めに自己の利益を犠牲にせることを感知したるなり。

氏は是等の犠牲が森林生産費の一部なることを感知したるもの、如し。而かも之を云ひ現はすべき術語を有せざるより、之に命するに之に對する報償の名を以てしたるなり。氏が利潤を以て生産費の一部となせるとき、氏は利潤を意味せずして、彼の利潤を以て酬ひらるゝ行爲を意味したるもの、如し。これ正に彼の賃銀を生産費の一部と稱して、實は結果たる賃銀を意味せずして、賃銀を其報酬とする勞働を意味するもの、犯せると同様の不精確なりと。

(三)

右の如き意味に解せられたる生産費は、貨物交換價值決定の上に果して如何なる作用を發揮するか。Senior に従へば、平等自由なる競争行はるゝところに於ては、貨物の價格は其生産費に一致せんとするものなり。而して此點に關する Senior の理論の結構は Ricardo の夫れと稍々趣を異にせり。即ち彼れは生産費を、賣手の側に於ける生産費と、買手の側に於ける生産費とに分ち、前者は價格の最低限、後者はその最高限を定むるものなれども、完全なる競争行はるゝところに於ては此兩極限は同一に歸するものとなし、貨物の價格若し之を超過するときは其供給増加

し、之に及ばざるときは供給減少するを以て、生産費は常に價格動搖の中心たるものなりと謂へるなり。原文を引用すれば左の如し。曰く、…生産費…は、之を生産者又は賣手の側に於ける生産費と、消費者又は買手の側に於ける生産費とに分たざるべからず。第一は勿論一定種の貨物、又は勤勞を提供して賣らんとするものが、能くその生産を繼續せんが爲め、忍ばざるべからざる勞働と節欲との量にして、第二は一定貨物又は勤勞の買手たらんとする人々が、若し之を買はずして、彼等自ら、或は其中の或者が自己及び自餘の者の爲めに、之を生産すべき場合に、其の忍ばざるべからざるべき勞働と節欲との量是なり。第一は價格の最低限に等しく、第二は其最高限に等し。何となれば、一方に於ては、何人も賣價のその生産に費やすどころよりも低きものを、販賣の目的を以て引續き生産することなかるべく、又他方に於て、何人も彼等自ら、或は彼等の或者が自己及び自餘の者の爲めに、更に少なき失費を以て生産し得べきものを、引續き購入することなかるべきを以てなり。彼の平等なる競争の支配を受け、何人も均等の便益を以て生産することを得べき諸貨物、或は更に的確に云へば、貨物の部分又は屬性の價值に就ては、その生産者に

取りての生産費と消費者に取りての生産費とは同一なり。故に是等のもの、價格は、其生産を繼續する爲め必要なる勞働と節欲との總量を代表す。其價格にして、此よりも下降せんか、其生産に携はれるもの、賃銀又は利潤は、生産の繼續せられんが爲めには之を忍ばざるべからざる勞働及び節欲の平均報酬以下に下降せざるを得ず。従て生産は早晩中止若しくは短縮せられ、遂に生産物價格の供給減少の爲め引上げらるゝに及んで已むべし。又價格にして其生産費以上に騰貴せんか、生産者は必ず其犠牲に對する平均報酬以上のものを受くべく、此事の發見せらるゝや否や、資本と勞働とは、此に異常の利益を生ずるものと假定せらるゝ用途に向つて流聚し、前に買手たり、若しくは買手の爲めに代れる人々は、自ら生産者に轉じて、遂に供給の増加が價格と生産費とを平均せしむるに至るべし」と(Ch. IV)。

(四)

斯の如く完全なる競争行はるゝときは價格即ち價值は(Senior)にありては價值の貨幣を以て現はされたるものを價格とす(生産費に一致せんとするものなり)と雖も、此生産費は勞働と節欲とより成り、而して生産費中にありて勞働と節欲との

占むる比例の必しも一ならざることは Senior の明かに認むるところなるを以て、Torrens は「同額の資本の用ゐらるゝところに於て、若し一方が他方よりも夙く市場に販出せらるゝときは、生産物の價值の異なることあるべきを認むと雖も、彼れは此差違の基づくところの原理を示さず。此原理は双方共に投せられたる労働は同一なるも、一方の場合に於ては他方よりも多くの節欲を必要とすることは是なり」(pp. 100-101)。價值が労働量と比例するの約束なきこと明白なり。然るに更に Senior は Ricardo の明かに否認せる地代 rent の價格中に入ること認むることに由りて、労働量と價值との關係を一層稀薄ならしむ。Adam Smith が地代を價格構成要素の二に數へ、Malthus が收益の遅速、製造上に使用せらるゝ外國貨物の量及び租税賦課と相並んで、地代の支拂が、投下労働量のみによりて價值の支配せらるゝを妨ぐる要素なることを認めしは、予の既に述べたるところなり。(本誌第十六卷第三號六二頁以下同卷第四號五八頁參照)。Senior の論は是等諸家の説を繼承するものなりと雖も、彼れは更に其獨特の理由に由りて、rent の概念を土地地代以外のものに擴張することを試み、労働者の收むる賃銀の中にも、生産上の犠牲に比例せざる rent の要素含まるゝことあり、從て賃銀と投下労働量との失比例よりして、労働量と價值との關係に新なる罅隙の生じ得べきことを認めたるなり。Senior も始めに於ては、rent の語を慣用の如く、占有せられたる土地の地味の肥沃、または位置の便利より生ずる特別收益の意義に解せりと雖も (p. 100)、更に進んで此語を生産上に犠牲を忍ぶことなくして生じ、或は忍べる犠牲の比例以上に生ずる一切の收益に適用す。謂へらく、既定の區分に從ひて、一切の生産せられたるものは、分ちて地代利潤及び賃銀とせらるべしとし、……而して賃銀及び利潤は、之を特殊の犠牲に對する報酬と認むべしとせば、……地代なる語の下には、何等の犠牲なくして、收得せるもの、或は別言すれば、その犠牲に對する報酬以上に收得せるもの、自然又は運命が、或は何等其收得者の努力を待たず、或は労働の發揮又は資本の使用に對する平均報酬以上に與ふるもの一切を包含せしめざるべからざること明白なりと。(pp. 91-2) されば Senior の所謂地代は、本來の地代の外、人の任意に企及すべからざる知識才能特權等より生ずる一切の特別收益を包含す。是に由て觀るときは、通常賃銀として労働者が受くるところの所得には、眞に労働に對する報酬の外、更に別

の要素含まるゝものと云はざるべからず。故に曰く、然らば異常の才能ある労働者の異常なる報酬は、之を地代と名づくべきか、又は賃銀と名づくべきか。その天恵より生ずる限りに於ては、それは地代なるが如し。然れどもそれは労働に服するの條件の下に於てのみ收得せらる。此限りに於てはそれは賃銀なるが如し。それは労働者のみ之を收得することを得る地代、又は自然要因の所有者のみ之を收得し得る賃銀……と稱することを得べし。然れども、労働は既に普通賃銀を以て酬らるれあるを以て、それは明かに一の餘剰にして而して、此餘剰は天然自生の恩恵なるを以て、吾人は之を地代と稱することを最便宜と思惟したるなりと (p. 129-130)。而して Senior の所見を以てすれば、労働者の受くる報酬にして、此の地代の要素を含むことなき場合は却て稀なるを以て、賃銀額が投下労働量を代表せざることは、即ち事物の通則たるものゝ如し。故に曰く、異常なる體力心力が異常なる報酬を受け居らざる業務は尠なし。嘗に一層良好に働くのみならず、また一層容易に働くは才能の特權なり。故に一般に第一流職人の生産せる貨物又は勤勞は一方平均労働量以下なることを見るべしと (p. 129)。

右に述べるところを概括すれば、Senior は價值を構成するものを賃銀利潤地代の三者となし、而して究局賃銀其者も亦必しも投下労働量と相應するものにあらざることを認めたるなり。Ricardo 既に純粹なる労働價值説を奉ずる者にあらざると雖も、Senior は上述の諸制限に由りて Ricardo よりも是に遠ざかると更に數歩なりしものと謂はざるべからず。

(五)

J. S. Mill に至つては、Ricardo の拓ける本道に沿ひて歩む事 Senior よりも遙かに忠實なりしと雖も、猶且つその究局到達したる結論は Ricardo の意見よりも労働價值説より隔たること明かに遠きものなり。今その述べるところの大意を記せんか (以下 Mill, Principles of Political Economy, edited by W. J. Ashley, 1917 に據りて引用す) 一物の價值とは、之と交換せらるゝ他の或物、若しくは一般の物の量の義にして、もと相對的の語なるを以て、一切の物の價值悉く同時に騰貴若しくは下落することあるべき等なし。或物の價值の騰貴は、當然他の物の價值の下落を意味し、或物の價值下落は、當然他の物の價值騰貴を意味す。一物をして價值あらしめんが爲めに

は、二條件の備はることを要す。利用あること、及び其獲得上に困難 *difficulty in attainment* あること是なり。獲得の困難の上より見て、*MIII* は貨物を三種に分てり。その供給量の絶對的に限定せらるゝもの、労働と出費とによりて、際限なく生産することを得るもの、及び供給量は生産によりて増加することを得るもの、此の生産増加の爲めに投ずる労働及び出費は、比例以上に多きを要するもの是なり。供給量の増加すべからざる貨物にありては、其價值は需要供給の決するところなり (pp. 448, 478)。無際限に増加し得べき貨物にありても、其一時價值又は市場價值 *temporary or market value* は、同じく需要供給之を左右すと雖も、此外に物の永續價值自然價值又は自然價格 *permanent, natural value or natural price* なるものありて、市場價值を支配し、後者は常に前者に一致せんとして之を中心として動搖す。 (pp. 456, 478 etc.) 此自然價格を定むるものは、貨物の生産費と普通利潤と是なり。而して貨物の市場價格をして、久しきに亘りて其自然價格より離反すること能はざらしむるものは、*Ricardo* の場合に於けると同じく利潤率の平均にして、若し一貨物の價值にして、其生産費を償ふに當に普通の利潤率を以てするに止まらず、更に之より高き利潤

率を以てせんか、此の非常利益に参加せんが爲め、資本は突進し來り、此貨物の供給を増すことに由りて其價值を下落せしむ。されば通則として、諸貨物は、各生産者をして生産費と普通利潤とを償ふことを得しむるが如き價值に於て、換言すれば、凡ての生産者に、其支出に對して同一利潤を與ふるが如き價值に於て、相交換せらるゝの傾あり。然れども支出即ち生産費の相等しき場合に、利潤をして相等しからしめんが爲めには、諸貨物は平均上其生産費の比に於て相交換せられざるべからず、其生産費の同一なる諸物は同價值ならざるべからざるなり (pp. 456)。但し後段に於て (p. 479) *MIII* は、生産費を構成する不變普遍的要素として賃銀と利潤とを擧ぐるを以て、右の如く生産費及び利潤と云ふは蛇足なるに似たりと雖も、その何れに従ふも利潤が價值を決定する一因素たることは争ふべからず。

茲に吾人の知らんと欲するは、右述の如き生産費又は自然價格を決定する上に於て、生産上に費さるゝ労働量は、果して如何なる位置を占むるかの一事はなり。*MIII* の云ふところに従へば、生産費の主要々素たるものは労働量にして、賃銀はその業務に由り異同ある限りに於ての外生産要素を構成するものにあらず (p. 456)。

蓋し價值は前述の如く相對的の語なるを以て、均しく諸貨物の生産要素に影響するものは、その相互間の價值を變動せしむることなし。故に一般賃銀率の高下は、諸貨物の價值を動かすことなし。たゞ一業務に於ける賃銀が他の業務に於けるよりも高く、或はその一業務に於て永續的に騰貴若しくは下落して、他の業務に於ては此事なき場合に於て、此不平等は價值に影響すと云ふものなり。

然るに前記の如く、*MIII*が價值は生産費之を決すと云ふは、若し貨物の市場價值より資本の出費を控除せる餘剰額の該出費額に對する比率が、平均利潤率以上に昇るときは、其生産者は普通以上の利益を收むるを以て、資本は他の産業を去りて、此の特に有利なる産業に集中し來り、其生産額を増加せしめて市場價值を下落せしめ、市場價值生産費以下にあるときは、反對の理に由て生産額減少し、從て之を騰貴せしめずんば已まざるべきを認めしに由るものなるを以て、茲に所謂生産費は、直接に生産者の出費項目中に現はるゝものならざるべからず。*MIII*は資本家が利潤の爲めに行ふ生産を論の對象となし、労働者自ら生計の爲めに行ふ生産は、姑らく之を顧みざるなり。*Whitaker*今労働に關してこれを云へば、生産上に費さるゝ

労働量は、ただその資本家の支拂賃銀額に現はるゝ限りに於てのみ生産物の價值に影響す。費されたる労働量には増減あるも、資本家の出費之が爲めに増減することなき限りは、生産者の利害は影響を受くることなし。労働量はたゞ賃銀を通じてのみ生産費を構成するものなり。故に今 *MIII*が労働量と賃銀とを併立せしめて、その價值に對する影響を論ずるは、*Senior*が労働と賃銀、節欲と利潤とを峻別して論を立てたるに比して劣ること數等なりと雖も、(*Whitaker*, p. 109) 姑らく甚しく語句に拘泥せずして之を讀めば、*MIII*の論旨は必しも人をして了解に苦しむるものにあらず。蓋し労働量は資本家の支出賃銀額を通じて價值に影響するものなりと云ふと雖も、賃銀率にして單一普遍ならんか、労働量の多少は直ちに支出賃銀額の多少に比例すべく、又諸貨物の生産に投下せらるゝ労働量既に一定せるものとすれば、労働者の受くる報酬率の異同は、直ちに資本家の出費の異同となりて現はるべきを以て、此意味に於ては労働量と賃銀率とは相待つて資本家生産費の決定要素なりと云ふも不可なきなり。彼れが任意可増貨物の價值は、之を生産する爲め支拂はれたる比較的賃銀額、及び此賃銀を支出せる資本家の收むべき

比較的利潤額之を定むるも、比較的賃銀額は、半ば比較的必要労働量に依り、半ばその比較的報酬率によりて定まると云ひしは、之を此意義に解すれば、人の承認を難んせざるところなるべし。斯の如くにして一業務に於ける賃銀率が其普通率以上にあるときは、此差異は其生産物の價值に影響す。例へば熟練労働の産物が不熟練労働の産物の大量と交換せらるゝが如きは、其労働がより高く支拂はるゝが爲め外ならず。様々の原因より生ずる賃銀率の不平等は、凡て明かに諸貨物の相對的生产費を變更し、從て完全に其自然價值又は平均價值に現はるゝものにして、諸貨物生産の爲めに必要なる労働の相對賃銀は、其價值を動かすこと正に労働の相對量と同じ。たゞ價值變動の原因として労働量と賃銀と何れが重きと云はゞ、Mill は労働を以て答ふ。蓋し必要労働量の増減は、毎時一貨物若しくは數貨物に就て起るに反し、賃銀の變動は一般に行はれ、從て著しき影響を價值に與へざるを常とするを以てなり。(p. 401)

(六)

利潤の價值に對する關係は果して如何。Mill は Senior の造語を採用し、利潤を以て節欲に對する報酬となせり (p. 403)。謂へらく利潤も亦賃銀と同じく價值を定むる生産費の一要素をなすと雖も、一般賃銀率の高下が價值に影響を與へざると同じ理に由て、その有ゆる物の生産費中に入る限りに於ては、利潤は何れの貨物の價值をも動かすこと能はず、その價值に對して多少とも影響あるは、利潤が或物の生産費中に入ること他の物に於けるよりも其度大なることに依てのみ然るものなりと。利潤が或物の生産費中に入ること他の物に於けるよりも其度大なるは、或業務に於ける利潤率の特に他よりも高き場合、及び利潤率は同一なるも、資本の投下し置かるゝ期間に長短ある場合是なり。此の資本放下期間の長短より起る影響に就ては、Mill も Ricardo の時以來屢々引用せらるゝ、保藏に由て増進する葡萄酒の價值を一例證とせり (p. 403)。一定量の葡萄酒と一定量の羅紗は同一量労働の造るところにして、此労働は同一率の報酬を受けたるものと假定せよ。今保藏によりて羅紗の價值は増進せず。葡萄酒の價值は増進す。假に葡萄酒をして希望の如き品質を有せしめんが爲めには、五年間の貯藏を要すとせんに、醸造者又は酒商は、葡萄酒の賣價が五年の終りに、複利法を以て蓄積せる五年間の利潤額丈

け羅紗よりも高きを得るにあらずんば、敢て之を貯藏することなかるべし。而かも葡萄酒と羅紗とは、本と同額の出費を以て造られたるものなり。茲に二貨物の相互に對する自然價值が其生産費のみに適合せずして、生産費に加ふるに若干を以てしたるものに適合する一例を見るなり。而して生産上に機械の利用せらるゝ場合が此と其理を同じうすることは、既にRicardoの詳説するところなるを以て、茲に再びMIIIの説明を引用することを須むざるべし。

斯の如く生産費中に含まるゝ利潤の比例一ならざるよりして、二個の結論を生ず、一は異種の勞働の受くる報酬率の異同を斟酌するも、猶ほ諸貨物は單に其生産に要する勞働量の比例を以て交換せられざること、二は利潤率の一般的騰落が價値に影響し、貨物の生産費中利潤を含むこと比較的多きものは、利潤率の騰貴下落に由りて其價值或は騰貴し、或は下落すること是なり。一般貸銀率の高下もその利潤率を動かす限りに於て、生産物の相對價值を動かすものとす。(pp. 404-6)

MIIIに従へば、際限なく其供給を増すことを得るも、此を行はんが爲めには費用の遞増を要する諸貨物にありては、其價值は現在最不利なる事情の下に於ける生産費之を定め、これよりも有利なる事情の下に生産せらるゝ貨物は、この費用の増額に等しき地代を生ず。而してMIIIは、地代は之を生ずる貨物の生産費中の要素たらざるものなり。(pp. 469-473, 479)と明言せり。即ち地代に就てはMIIIは原則上Ricardoの壘を固守するものたるなり。

今MIIIの價值と勞働量との關係に關する見解をMIII自身の語を以て概括すれば左の如し。曰く「若し二物の一方が、平均上價值を有すること他方よりも大ならば、其原因は必ずこれが生産の爲めに或はより、大なる勞働量を要するか、或は永久的に一層高率の報酬を受くる種類の勞働を要する事、若しくは此勞働を支ふる資本又は資本の一部分が、之を一層長期に亘つて放下せざるべからざる事、若しくは最後に生産が永久的に高率の利潤を以て償ふことを要する何等かの事情を伴ふ事に存せざるべからず。是等諸要素中生産に要せらるゝ勞働量最も重きを占む。自餘のもの、效果は、何れも輕微にはあらずと雖も、之よりも小なり」と(p. 480)。資本放下期間の長短が、勞働量と價值との關係を亂るの要素たることは、既にRicardoの縷説するところなり。業務の種類に由りて利潤率に異同あることはRicardo之

を詳論せずと雖も、猶ほ之を看過したるにあらず (Principles, p. 83)。故に Mill が勞働價值説に Ricardo 以上に新たに加へたる修正は、熟練勞働に對する高率賃銀が勞働量と相並んで價值形成の要素たることを認めし一事に存するものなり。之より先き Senior は、勞働量と價值との比例を破る原因として、地代と熟練勞働に對する特に高率なる賃銀との二者を擧ぐるに歸着する説を述べ、Mill は地代の價格形成要素たることを否認して、一步 Ricardo に還らんとしたれども、猶ほ賃銀が必ずしも勞働量を代表するものにあらざることを認めて、明かに Ricardo よりも勞働價值説に遠ざかれり。Mill の次に來れる Cairnes の所謂不競争團 non-competing groups の説は、賃銀と勞働量との失比例を論すること更に一般の精緻を加ふるものなり。

(未完)

近世資本主義起源考續論 (二)

阿部 秀助

二

ブレンタノ教授の見る處によれば近世資本主義に向つて對立的關係を有せしものは封建的經濟組織である、而して此封建的組織なるものは曾つて佛蘭西の學者によりて主張せられし如き羅馬帝政時代の遺物たる *beneficia militaria* を基礎とするものにあらざると共に又た獨逸の學者によりて論せられしが如き獨逸民族特有の產物にあらずして寧ろ自給自足を以て特色とする自然經濟の流出し發展する必然的狀態換言すれば國民經濟が經過するに必要な一個の階段を示せるものである、斯くて封建制度なるものは之れを歐洲諸國に求め得ると共に小亞細亞に於ても日本に於ても其他ペルー、メキシコ等に於ても之れが史的證左を求め得るのである、而して封建的經濟組織と資本主義的經濟組織の特に異なる點を考